

大正の反逆とニヒル

最初の労働者詩集『どん底で歌ふ』が出たのは大正九年、この時期日本の詩壇は民衆詩派の活動期であった。その自由な詩形とデモクラシーの思潮を背景にして人道主義のうたを見せたが、農民や労働者や市民のうたごえではなく、社会変革を指向するということでもなく、階級的立場を強調するものでもなかった。

日本の詩は新体詩として出発したとき文語の七五調という韻文調に拠ったが、明治四十年代に至って口語詩が始まり、やがて自由詩の時代となった。日本語の詩は字数の定め他には散文と明確に区別する手段をもたなかったが、それを自由詩の究極に求めねばならぬ時期に向っていた。民衆詩は日本の詩を解放して言葉の形式的抑制からは自由にしたが、詩それ自身において自律することを知らなかった。やがて大正の詩は、その改革を目前に迫られていた。しかし、ただひたすらに形式の変革をのみ追求して新しい詩へ到達し得るものではない。そこには二方面からの要因が強く働かねばならない。

大正に発禁処分を受けた代表的な詩集として記憶に残るものは、最初の労働者詩集『どん底で歌ふ』、それについて松本淳三の『二足獣の歌へる』や後藤謙太郎の『労働放浪監獄より』などである。この三つの詩集に底流するものは社会主義による労働者意識と階級的反抗精神である。しかもそれぞれにニュアンスに異なるものがあり、その異なるものと共通するものとを合して、明治の社会主義の詩の文学的間口をひろげ、階級認識を深めつつ詩人の個性的な特長も顕著にし、昭和のプロレタリア詩に至る歴史的責任を背負ったのである。

この時期のもう一つの特長は、詩の対象が拡大し、庶民の中にひろがりはじめたことである。はじめは青春的情感の解放のためにうたわれたものが、政治のため、生活のため、反抗のため、というように拡大してきた。詩をかく人々も亦増加し、民謡、童謡といった新しい詩ジャンルの開拓ともなった。民衆が社会の主役となってゆこうとする方向と、それは合致しようとするものであった。

この時期に発禁処分となった前記の詩集の詩人たちは、その自由開拓の先達であった。

今日見れば、完成された一篇の詩というものは彼らのなかにはめったに発見されない。だが語りつがれるような詩篇は残さなかったが、彼らの詩は社会の変革を前ぶれし、詩と生活のかかわりにおいて新しかった。

彼らによって工場労働者の階級的自覚が詩の対象となり、個人の欲求を詩にうたうことの試

みも始められた。

だが、総じて大正期のわが国の詩人たちは、新興詩人、社会主義詩人として、詩壇的に注目されながら文学としてまだ十分強くなかった。はるかに遠く省みれば、あるものは社会意識、ある者は反抗精神、あるものは人間の自由と、それぞれに明治の詩よりも進んでいながら、どこかバイタリティ不足であった。

何故か。デモクラシーの風潮に反撥を示しながらなおその時流の中に自分を置いて一時の安穩でなかったともいえないし、労働者階級としての自覚も力弱く、抗争する實力も低かったようで、要するに、個々にニヒリスチックであり、不満を一杯抱えてはいても、集団して爆発するエネルギーの生誕にはすこし遠かったのである。それはいいかえれば、平和革命論みたいなもので、平和に革命が望まれるほどよいことはないが、革命は平和裡に來ないものとは考えず、ひたすら願望してばかりいる姿にも似ている。

個々に反逆し、放浪することも社会にたいするレジスタンスではあるが、そのレジスタンスはまだ力となって発すべき予測がない。大正の発禁詩集とその詩人たち、殊に社会主義や労働運動とかかわりから出発した詩人たちは、ここから今一步を進めるために精一ぱい活動したのであった。正吉も公敬も淳三も、あるいは後藤謙太郎も、民衆派詩人らと比較するとずっと新鮮、はるかに個性的である。だが「詩とは何か？」というもう一つの問題にぶつかって

かなかった。そんな詩と詩人の問題にかかづらわってはいられない、と彼らは思ったであろう。だが、詩とは何か、という疑問を持たなかったとすれば、民衆詩派までの詩人とそのイデオロギーとを否定したことには成り難い。それは思わざる不足というべきことである。

『労働放浪監獄より』の後藤謙太郎の詩心にはニヒルの容量が大きくあるにはある。しかし彼はそのことの新しい意義を知らなかった。だから彼の詩は働く人間の不幸をうたい、そこから離脱せざるを得なかった者の放浪をうたいはしたが、その離脱した労働者、よる辺なき放浪者こそが、やがて変革のために主体的に活動すべき時の来ることを考えつかなかった。

大正の終り、関東大震災ごろから結成されたテロリスト集団ギロチン社の、後藤はメンバーであった。彼は早く死んでその具体的な活動には加わらなかったが、その同志の中浜哲が後に獄中で書いた詩、小説、対話といったものが或る雑誌を挙げて特集され、それが発禁詩集の一冊として紹介されている『黒パン』である。この中で中浜は縦横にあたらしい詩の手法を試みていた。

活字の大小、行の横がき、たてがき、その転倒、第一次世界大戦後のヨーロッパから移入してきたダダ、表現派の類である。テロリストとして処刑された中浜の詩における試みは、期的には「赤と黒」の運動などの後であったが、変革に主体的条件を備えた詩人として、死刑を前にしつつこの様式への追及には、考えらるべき詩の内容と形式との問題がひそんでいるので

はないか。

「女とのただれた性生活のなかで、日記がわりにダダの生活記録を書いた」と著者自ら語っていた遠地輝武の『夢と白骨との接吻』は、詩集としてのうつくしきまでに至っていない性急さのなかで、特殊なスタイルを見せている。つまりこれは詩を否定するというかたちの詩、の試みとしてであり、いわば詩集と名づけたから詩集である、といったような無責任な自己主張である。ではこの詩には何の目的もなかったか。否である。彼は自己破滅を前にして、自己を破滅させようとする社会とその他一切のものを、詩をかいて詩を否定することと同じに否定しようとしたのである。この詩集は作品に見るべきものはないとしても、その意識によって記憶される。ダダの詩としてはこれよりも前に、高橋新吉の『ダダイスト新吉の詩』などによって詩の变革ははじまっており、つづいて「赤と黒」集団の強烈な、形式と詩意識の破壊が打出されている。遠地輝武の詩集はこれらの勢いにつづくものであったが、破廉恥を咎として常識と形式と道徳に否定を敢えてしたことに、回想の意義がある。

これら詩の破壊者たち、前衛詩人群の出現は、詩の行から行へつづく所謂詩における意味の伝達という散文的な処方箋をまず充分に過去のものとして立証した。そして絵画、彫刻、音楽とその芸術的、主観的な中味を共有する道をきりひらき、また思想と詩、表現と詩のかかわりにおいて、新しい地平線を望むものとなった。

この前衛的詩人の活動によって、より尖鋭に社会的変革を推進しようと欲する詩と詩人の分野が確実にひらけたこと、この歴史の一端を背負うものとして大正の労働者の階級意識による詩と前衛的詩人の活動はあった。四つ五つの発禁詩集はそのために十字架に上ったのであった。

根岸正吉・伊藤公敬『どん底で歌ふ』



今日になって読んでみると、その詩は言葉も形式も貧しいのだけれど、当時大正期の日本詩壇を風靡していた民衆詩派などの作品よりも、ずっと気魄に満ちている。洗練された伝統的な詩歌の言葉によらなかつたところに、かえって階級意識に目覚めた労働者の現場の息吹きが強烈で、その点ではのちのプロレタリア詩にまさるほどのものがある。この、わが国で最初の、記念すべき労働者の詩集『どん底で歌ふ』は、根岸正吉、伊藤公敬という、たがいに相知らざる二人の合著であるが、その二人をここに出遭

わせた、つまりこの詩集の生みの親であった堺利彦は、序文でこの労働者詩人を紹介してこう語った。

「この集の著者根岸正吉君が私の家に遊びに来ている時、その姓名だけ言って来客に紹介すると、その来客は大抵、『ア、そうですか』と至極冷淡な、通り一遍の挨拶をするが、『昔、「新会社」に詩を載せたN正吉というのが此の人です』と言うと、『アッ、あなたがソウですか』と、忽ちその挨拶が意気込みの違った熱心なものになる。彼が工場生活の間から発したウメキ声はそれほど深い印象と感銘とをわれわれのグループの多くに与えているのだ……」

「この集の今一人の著者たる伊藤公敬君は私の直接に知っている人ではないが、横浜に於ける我々のグループでは久しい前からよく知られている人である。彼は初め印刷工として指四本の肉税を払い、後ち又、波止場人足として起重機の上から落され、今では歩行の困難を忍んで労働しているという。彼の歌はそういう生活の間から歌い出され、そして人さし指の残存している部分と親指との不自由な働きに依って書き現わされたものである。」

この序文は、二人の詩人を語って余すところもないくらいである。敢て付加えるとすれば、大正九年五月に刊行されたこの詩集は、明治の石川啄木と、昭和のプロレタリア詩時代の中間にあって、働く者の詩の歴史の上に、しっかりとその位置をもつものだ、というくらいのことである。大正末から昭和初めにかけてのプロレタリア詩人たちの、その多くはインテリゲンツ

イアであったために、発想にも詩の形式にも、第一次世界大戦後の前衛詩の道をたどり、そしてそこを通り抜けることによって、新しく階級的な詩の方法を採りあてたのであったが、この詩集『どん底で歌ふ』の二人は、根っからの労働者であり社会主義者であったから日常の言葉がそのまま新しい詩の言葉になり得た。巻頭に著者二人の言葉が並べられている。

此集を父上に捧ぐ

父上は私を少しも解し給はず。この集に依り多少の理解を得ば幸なり。

——正吉

此集を母上に捧ぐ

せめて此集により、何故に私があなたの意に逆うかを知って下さらば幸甚。——公敬

この二人の詩人は、詩をもってまず働く仲間に、同志に、語りかけるべく詩作したのであらうが、もう一つ、自分の日頃の意見と行動とを、彼らを理解しない家人たち——父や母に知らせたいという思いをひそめつつこの詩集の刊行に加わったのであると自ら語っているのである。大正期の社会主義活動も労働者の組合運動も、反逆的な行為としか受けとられなかったものであり、その下で自分の信頼をつらぬき通す苦しみを、はからずもここに語ったのである。

そんな時代的背景を理解するとき、この詩の先進的な意義は倍加して評価されねばなるまい。
この詩集は次のように構成されている。

赤い実

根岸 正吉

(二十篇)

鶏が鳴く (七篇)

薇薔の棘 (八篇)

醜い僕 (三篇)

波止場がらす

伊藤 公敬

波止場がらす (短歌二十八首)

工場哀歌 (二十五篇)

繊維工場や印刷工場の労働者の経験のあった根岸、波止場労働者、工場労働者として長く働いた伊藤、ともに職場の詩があり、階級的に目覚めた労働者としての生活とたたかいのうたを残している。

疲れて帰るその時に

何が私を待ってるだろう。

家もなし

妻もなし

其日の新聞もなし。

親を見捨てた私には

情のこもる音信^{おとずれ}もなし。

下宿^{ひよき}の一室

そこに一台の机さえなく

鈍い五燭の電灯が

隅々暗く光るのみ。」

(疲れて帰るその時に——根岸)

青年会館の正門へ!!
要求は簡単である。
目的は単一である。
屋内が満員ならば、

屋外に入れよ。
門内は人子一人なき寂寞である。

之こそは

今宵此地に集れる

幾千人の要求である。

それを遮る警官に

もはや理屈は不要である。

只青年会館の正門へ。」

(労働者大会——根岸)

十二時間の勤めを終えて

わざわざ郊外からやって来たのだ。

山を下り川を越え

はるばる足尾からやって来たのだ。

発表

六折

それを此儘追返えすとは
ものの解らぬにも程がある。

「諸君！

開けずんばこんな門

たたき壊わして這入ろうぢやないか」

言葉半ばに魔の手は延びて
猛り狂いつ捕われて

暗き方へと引かれ行く

「……森も林も武装せよ、
石よ何故飛ばざるか……」

〇〇の歌うすれ行く。

(場外——根岸)

紹介したこの三つの詩が根岸正吉のものとして特にすぐれているのではない。ただこの三つの詩に、目ざめた若い労働者の生活と、ある演説会における弾圧の情景がよくとらえられてい

る。簡潔でなお且つ写實的な描写力もある。彼等の詩は、詩雑誌などに発表されたものではなく、社会主義運動の雑誌や新聞に発表されたものである。啓蒙とアジェーションに使命を果たすべきことであつた。

伊藤公敬の短歌と詩一篇を紹介しよう。

廃船のデッキをふめばききと鳴る今日もアブレて帰る仲仕ら

検疫の終るをまちて舷橋をのぼれば帰れる移民が覗く目

群がれる、波止場稼ぎのボロ服が船ぞ見ゆるとどよめく夕べ

「吾等が日ノ 五月一日」この国のおきては赤き旗を禁ぜり

朝鮮に独立運動起り居り米はあがれど日本のしずけさ

(注・伊藤は啄木風に三行書きであつた)

活字三本きづつけしため

いま老いし職工は打たれ蹴らる——

惨忍あくなき職長の

丸太の如きふとき腕は

戦きふるう衰えし職工の

顔と頭ところきらわず

力にまかせて乱打し且つ

あらゆる言葉もて罵り喚く

真に同情する者なく、

弱き者あくまで弱く、

真に彼の味方となる者なく、

さげすみ或いはあざ笑う。

僅か活字三本きづつけしたために

(工場哀歌——伊藤)

詩集『どん底で歌ふ』が出た大正九年といえ、ロシア革命があり、第一次世界大戦が終り、経済不況からわが国には米騒動が起り、労働争議が相ついだ後である。この詩集が発禁処

分に遭ったのは、詩の内容の反抗性のはげしさのためであった。

注、根岸正吉はこの詩集の中でN正吉ともかいているが、ここでは統一して根岸正吉とした。

注、詩集の表紙文字は『どんぞこで歌ふ』であり、扉その他は『どん底で歌ふ』である。ここでは後者をとった。

注、発禁となったこの詩集は、名前を知られながら実物は稀であったが、戦後になって漸く紹介され、昭和四十二年七月に横浜の「労働詩集刊行委員会」によって復刻された。

松本淳三『二足獣の歌へる』

一九一七年（大正八）の根岸正吉と伊藤公敬の詩集『どん底で歌ふ』につづく労働者の詩人の詩集として一九二三年の新島栄治の『湿地の火』と松本淳三の『二足獣の歌へる』とが記憶によみがえる。

これらの詩人とその詩は、雑誌『赤と黒』のアバンギャルド活動の以前のものである。ということはイデオロギーと詩とのかかわりにおいて、その表現方法の改革をまだ痛感しなかった

時期の人々だということである。だからその詩には憎悪と怒りの感情が語られてはいるが、何かを破壊する情熱といったものは表現上まだ顕著でなかった。また、詩人自身の内部の未解放に向けての不安も不満も自らにたいして持っていなかった。そのような不足はありながらも、関東大震災以前の左翼系労働者詩人としての存在を主張するだけの激しさが、彼らにはあった。

詩集『二足獣の歌へる』は松本淳三のただ一冊の詩集だが、その序の冒頭の

「この処女詩集を、三十年前、発狂すると同時に家出し、其後香（よう）として行方をしらぬ、当時の若き騎兵少尉の、まだ見ぬ父なる人に捧げる」

という言葉と

「松本淳三（淳三）（1895—1950）、島根県美濃郡に生まる。慶大中退。感ずる所あって久原鉱業所九州佐賀関製錬所に日給三十三銭の労働者となる。のち雑誌記者になる。——「種詩人」同人。一九二三年無産派詩誌『鎖』を刊行。つづいて『詩を生む人』『黒嵐時代』等を主宰したが、途中詩作を離れて社会民主主義政党に参加——」（『世界現代詩辞典』）という記述によってこの大正のプロレタリア派詩人の姿は、理解されよう。

が、さらにつけ加えれば、彼はアナキズム系の一詩人として「文芸戦線」に加わっていたが一九二六年（大正一五）における文学のアナ・ボル共同戦線の破綻にもなつて、松村正俊らとともに「文戦」を去った。二号か三号で止んだ詩誌『黒嵐時代』を出したのはその直後で、若

い広沢一雄、矢口洋之らを糾合していた。

詩集『二足獣の歌へる』は大正十二年三月、当時神田神保町十番地にあった自然社から刊行されている。その自然社は前田河広一郎の『三等船客』や新井紀一の『燃ゆる反抗』、中西伊之助の『死刑囚と其裁判長』等、初期のプロレタリア文学作品を刊行した出版社で、松本淳三もまた『種蒔く人』に参加して以来、左翼的詩人としてその存在を知られていたのである。

当時は社会主義、労働運動が力を得、左翼文学もようやく勃興の機運に向かいつつあった。関東大震災前の、まだ前衛的芸術の洗礼をうけていない、いわばプロレタリア詩として前期的な性格が濃く、彼の詩に見られる時代的制約は、四十数年をへだてた今日の歴史的感想としても、それはやむを得ないところであろう。次の作品などに彼の詩の特色がある。

おお、肉体という字をこの世で

いちばん高いところへ祭れよ

おお靈魂といふ字をこの世で

火葬の三等にたのんで来い

馬鹿 人間には尻っぽがあるんだ

(尻っぽ)

私が描かうとする美しい絵はかの猩々の姿である

若い雌を

その足元に□□□□□□

まっ赤に

まっ赤に

おお火柱のごとく つっ立つ彼の猩々の姿である

(私が描かうとする絵)

豪放ではなく、むしろささやかな思を述べたすぎない詩であるが、ここにひそむババリズムには、わが国民道徳の、漠然と考えられていたお上品さにさからうものがあり、それがめずらしく「詩」に書かれたということと「二足獣」の歌へる、などという人間蔑視とも見える題名のもつ反抗的な性格が、この詩集の発禁理由となったのであろうかと考えられる。

詩の言葉の上の階級性や革命的な叫びは、この詩集の表面にはまだあらわれてはいないが、既成道徳を軽蔑してみせる抒情は、反抗的な階級感なくしては容易に発想し得るものではなかった。

しかし松本淳三の詩はその後も前期的プロレタリア詩の領域をついに出口がなかった。おそらく『赤と黒』その他、彼の後輩たちが自己破壊的方法をくぐりぬけて、そして突きぬけ



彼の詩は、日露戦争ごろから起った社会主義の詩から、それを受けて活動したプロレタリア詩までの三十数年の歴史の中で、大正九年の『どん底で歌ふ』につづく労働者の発禁詩集ということになる。しかも『どん底で歌ふ』にくらべて、はるかに現実に向かつて否定的、いわば革命的意欲のはげしさを持っている。しかし、いっそう注目すべきことは、彼の詩が、社会主義宣伝のための啓蒙詩ではなく、

兵営に社会主義新聞や宣伝文書が持ちこまれた事件)のために捕われて、未決監で死亡した。熊本県の日奈久に生まれた彼は、早く郷里を出て労働者として各地の炭坑を歩き、満洲にも渡った。その土地土地における活動のため熊本、栃木、宇都宮、上田等の監獄にも入って、その折の作品が残っている。

大正十五年に彼の遺稿集が刊行されると決まったとき、同志の希望によって序文をかいた中浜哲は、死刑ときまってその時大阪の刑務所内にいた。ニヒリスト或いはテロリストの運動がほとんど敗北しつつした中で、わずかに残った友人たちの手で後藤謙太郎の詩歌集が出されたのである。

て進んでいった反逆的な文学活動には方法的に同調し得なかったためではなかったかと思われる。そしてそのことと昭和六、七年ごろから、いち早く東京府会議員となり戦後に島根県から代議士に出て社会党文化部長に就任したなりゆきは、彼にとっては一すじのことであった。そこに松本淳三の詩人活動の时期的文学的限界があったともいえるのだろう。

しかし『二足獣の歌へる』の発禁は初期のプロレタリア詩の活動を記念する出来ごとの一つであった。

後藤謙太郎『労働放浪監獄より』

正しくいえばこの一冊は詩歌集である。詩と短歌を彼が大正十四年秋に巣鴨監獄内で獄死した後、友人たちがそのときまでに彼が発表した作品をあつめてつくったもので、詩と短歌がほぼ同じくらいの分量であった。詩人後藤謙太郎の名は戦後まで一部のアナキストたちが記憶したに止まっていたが、戦後はやく刊行された『日本現代詩大系』(全10巻・河出書房)の第八巻に彼の詩が紹介されてから、人びとに彼の詩人的存在がわずかに知られたといつてよい。

後藤は、大正十一年に東京でひそかに結成されたテロリスト集団ギロチン社のメンバーであったが、その活動に入らぬうちに、彼がそれより前にした軍隊宣伝事件(姫路、岡山、金沢等の

労働者としての叫びの詩だったところにある。「雪の線路を歩いて」の部分を紹介しよう。

貧しさの為に俺は歩けり
ひとすじの道 雪の線路を俺は歩けり
貧しさの為に歩ける俺には
火を吐きて 煙を挙げて
罵るごとく 汽笛を鳴らして
走りゆくあの汽車が憎し
文明の利器なれども俺には憎し

ひもじさの為に疲れて歩ける俺には
それ食えがしに汽車の窓より
穀の弁当を投げつくる人の心が憎し
とりわけて今 村を追われて歩ける俺には
スチームに温められて

安らかに旅する人の心はなお憎し

われ等が汗にてなりし

秋の収穫を取り去る代りに

彼の怖ろしき文明の病毒を運び来る

あの汽車は

毒蛇のごとくたまらなく憎し

毒蛇のごとくたまらなく憎きはあの汽車

野獣の呪いのごとく 夜も日も喰りて

若き男女の幾群を

ああ痛ましき都会の工場に送り出す

たまらなく憎きはあの汽車

(雪の線路を歩いて)

「雪の線路を歩いて」というこの詩の叫びは、社会的自覚をもちつつ、あくまで資本主義時

代の階級的自覚をもつ労働者の詩であるところに、先駆性とともに目覚めた労働者の爽快さがある。これは文語体の詩だから古いなどいってはいけない。この詩を貫くものは、理論から入った階級闘争説以上に、働く者や貧しい者の実感としてとらえられた「文明」の圧迫にたいする反撥である。

労働よ また放浪よ その間の俺の休息所よ 監獄の窓
高らかに今日も唄えり革命歌 鉄の窓より腹の底より

(鉄窓より歌う)

放浪と失業によっていじけてしまう人間もある。その中に自分を駆り立てて絶望的なまでに反抗に燃える者もある。アナキスト・ニヒリスト・テロリスト後藤謙太郎の詩は、反抗とともに存在するものであった。

永年この詩歌集は、発禁のために名を知る人も手にとることはできなかった。われわれは写本をつくって分けていたりしたが、昨年(昭和四十四年)大阪で、彼の古い同志たちの手で復刻され、昔の姿に再現されている。